

がんを早く見つけて体にやさしく治す

～がん診療における画像診断・画像下治療（IVR）の役割と最前線～

濱本 耕平

画像診断は、がんを早期に発見し、がんの広がりや性質を調べるなど、がんの診療に欠かせない検査のひとつであり、がんの適切な治療を行うための方針の立案や予後の予測に重要な役割を果たします。画像検査には、超音波検査、レントゲン、CT、MRI、核医学検査などがあり、超音波、X線などの放射線、磁気を使って安全に正確な診断を行うことができます。一方、がんの種類や広がりによって用いる画像検査は異なるため、適切な画像検査方法を選択する必要があります。我々放射線科医は、がん患者さんの画像診断を行ったり、患者さんが安全で適切な画像検査を受けられたりするように、画像検査の管理を行っています。最近では、画像診断における人工知能（AI）の有用性が知られるようになってきており、我々の施設でも一部、AIを取り入れています。

また、がんと診断された方に対しては、がんの種類や進行度などに応じて、手術や抗がん剤投与、放射線治療などの様々な治療が行われますが、その中の一つに IVR（アイ・ブイ・アール）という治療法があります。IVR はさまざまな医療場面で活躍の場を広げている治療法で、正確には「Interventional Radiology=インターベンショナルラジオロジー」、日本語では「画像下治療」と訳しています。文字通り、X線やCT、超音波などの画像診断装置で体の中を透かして見ながら、細い医療器具（カテーテルや針）を入れて、標的となる病気の治療を行っていきます。IVR は、外科手術のようにおなかや胸を切らずに、体の奥にある臓器や血管の治療ができる方法です。そのため、患者さんの体への負担が圧倒的に少ないという特徴を持っています。また、医療器具を入れる穴も数ミリ程度と小さく、器具を抜いた後は縫う必要もないので、処置後の傷もほとんど残りません。IVR は 1980 年代に米国で始まった技術で、日本では 80 年代の中頃から広まり始め、今や IVR はさまざまな医療の領域で欠かせない存在となっています。

今回の講演では、がん診療における画像診断と IVR の役割と最前線に関して、わかりやすく解説したいと思います。